訳詞《佐保会コンサート》

舞踏への誘い　（1906 年）

貴婦人さま、やさしく腕を
腰に廻して良いでしょうか？
貴女は愛の船、
その船には帆がありません。
私は帆、
空色の海で、船を操りましょう。

貴女は漂う船、
音楽の海で揺れ動く。
私は丈夫な帆、
航海を導き勇気づける。
船は波に乗り上へ下へ、
帆は風に合わせて降りたり広がったり。

お望みですか？
優しいガヴォットのような波を。
お望みですか？
優雅なワルツのような波を。
情熱的で大胆なステップを。

私は跪き、貴婦人さま、
あなたをダンスにお誘いします。

≪**四つの抒情詩“楽園詩編”より**≫

詩：G.ダンヌンツィオ

1：ある夢　（1920 年）

夢が私を導く静かな並木道で、
私は自らの足音を聞くことはない。
沈黙と光に満ちる時、
空は真珠のカーテンと同じ…

糸杉は、
その深い色をした先端を天に向ける：
微動だにせず、泣くこともなく；
しかし、悲しげに、
しかし、それほど悲しげでもなく、
墓地の糸杉たちよ…

近くには人知れぬ街、
ほとんど形はなく
遥かいにしえに人々が住んだ、
私の想いが消えゆくところ…
沈黙の並木道を行きながら…

私は自らの足音を聞くことはない。
私は影のよう、私の苦しみは影のよう
私の人生すべては、
はっきりとしない影のよう、
不確かで、見分けがつかず、
名前はない…

2：ナイアデ　（1920 年）

薄暗い森の中で溢れる　静かな瞬き、
それは、軽やかに静かに広がる水の輪。
その神秘はベールに隠されている。

しかし、さあ今、泉の水は湧きあがり
水の底には、婚礼の場を望むことができる。
今もなお、愛の喜びに満ちた名残を見る。
婚礼をつかさどるのは、月の女神セレーネ。

さて、女神セレーネが去り、
パルナソスの女神アルジーレ達も去り、
婚礼の場には誰もいない…
夜の至高の静けさの中で、水は鎮まる。

そうして、また、どこからともなく
聞こえてくるのは　湧きあがる水の音、
（泉の精は、アルジーレを愛した恋人）
目に見えない手が、その中に沈む
（その水を飲むと、過去を忘れるという）
その至福の中へ…

“ナイアデ”は、ギリシャ神話の女神。神々の王ゼウスの娘。森の湧き水の水源に住む。結婚と繁栄、豊穣と安らぎの守護神。

3：夕べ　（1920 年）

ここに居て、お願いだから、ここに居て。
立ち上がらないで！
光が必要でしょうか？
いいえ！
この夢が続くようにしておきましょう。
お願いです、ここに居て。

私たちを傷つけるでしょう、おそらく、
矢のように、その光は！

昼は、あまりにも長すぎた、
ああ　あまりにも！
昼が、また戻ってくることに、
私は、恐れ慄いている。
光は、まさに矢のようだ！

あなたも、それを愛してはいないでしょう。
そうでしょう？

あなたの目は、昼の光に疲れている。
瞼は開くことを拒んでいるかのよう、
苦悩に満ちたその目の上で。

これ以上の悲しみは、ないのだから。
本当に…
あなたの口もとが笑わなくなった時、
動かなくなったまつげが、
両の頬に影を作る。

これ以上の悲しみは、
ないのだから…

4：昔の歌に寄せて　（1920 年）

聞いてごらん？　僕たちの言葉を、
あの古い歌から現れてこないかい？
僕は君を蘇らせた。
君は再び太陽を見て私に語りかける。
君はこう話していたのだ。
聞こえないかい？君は言った…

「私、貴方の心が読めるの、
もう私を愛していないのね。
これが最後と思っているでしょう」
私は、少し色褪せた口許を見る。
「もう愛していないのね。
これが最後ね。でも、貴方が私を
捨てる前に願いを聞いて。
ああ、貴方の心の中で
私が死ねますように！
昔、口づけしてくれた、
こめかみの上の髪が、
こんなに白くなったというのに、
貴方は私を許してくれないのね。」

僕は、青白いその首にかかる白髪に、
過ぎ去った日々を見た。
そして、君に言った。
「静かに…！僕は君を愛しているよ」
君の美しい目は、私の口づけの下で
涙に潤んでいた。
「うそよ、うそよ」と君は答えた。
僕の手に口づけしながら。
「でも、大したことじゃないわ。
うそだって分かっているのよ。
でも、もしかしたら、ある日、
死んだ私を愛してくれるのでしょう」

天蓋は吸い込まれるように高く、
寝台は墓のように暗かった。
横たわる身体に覆いはなく、
沈んだ寝台の中で、それは、
すでに変わり果てた姿になっていた。

僕はバルコニーから、遠くの村を見た。
河が奔放に流れるそこは、
断崖に囲まれ夏の日の鮮紅色の光に、赤々と燃えていた。
そして風は、
遥かな果樹園の芳香を運び、
そこでは、豊満で逞しい女達が、
燃えるような花々の中を
歌いながら行き来していた。

昔は確かに愛し合った男と女。どんな物語があったのかは定かではありませんが、今愛は色褪せてしまった。男はそれを隠し、女はそれを見抜く、深い諦めと共に。二人の会話と、それをつなぐ男の醒めた心の声、そして、最後に色褪せた愛の風景とは対照的な、夏の情熱的な風景が語られて詩は終わっています。

●G.ダンヌンツィオ（1863 - 1938）は、一世を風靡したイタリアの詩人、退廃的な作風ですが、かつての美しい祖国や過去の物語に想いを馳せ、それが、作曲家レスピーギの古典音楽の美しさを自身の作品に甦らせる作風と、うまく共感し合っています。
時代はファシズムに突き進むころ、平和で美しかった過去を思い出させ、破滅に向かおうとする祖国を、作品を通して必死に押しとどめようとする芸術家の姿を見ることができるようです。
【佐保会:20.05.2017 Sab.】